

## 特別企画

# 学長インタビュー

内藤 喜之 学長



内藤 喜之 学長

大学を代表する人物は学長であるが、学長がどのような人物かは、どの大学でもほとんど知られてはいない。東工大もその例外ではなく、筆者の周りにも学長の名前すら知らない人がいるくらいだ。そこで我々は、新しく学長に就任された内藤喜之氏にインタビューをすることにした。今回のインタビューでは学長の人物像をよく知るために学長個人の考えなどに焦点を置くことにした。ここ東工大の出身者でもある学長はどのような人物なのか。これから始まるインタビューの内容に、じっくり目を通して頂きたい。

## 工業化社会がもたらす弊害

学長が東工大に進学された理由は何ですか？

私がこの東工大へ進もうと考えた理由は単純でした。私が中学生くらいのとき、兄がこの大学を三回受験して落ちてしまったんです。兄が三回も落ちたので、「よし」という気持ちでがんばりました。まぁ動機は非常に簡単でした。

ちなみに、私が学生の時は現在のような「類」というもののがなく、言ってみれば、入学時には全員が同じ類に属しているようなものでした。それで1年から2年になるとき、成績で学科に振り分けられていきました。私が学科所属を決める際に、偶然にもNHK、Victor、東芝などのかなり偉い方と家の関係で知っている人がいまして、進級について相談することが出来たのです。学生の頃、私は数学が好きだったので「このような状況で学科を決めたいのですが、どこに進んだらいいですか」と尋ねました。そうしたら「数学が好きななら電気に入ってみましたが、その時クラスの連中は、アンプとかチューナーとかそういう話をしていたんですよ。私は電気の「で」の字も知

らなかったので、全く専門用語は分からない。それでいいけないと思い、ラジオぐらい自分で作れなければと考えて、秋葉原に行って、部品を買いラジオを作ってみました。そうしたら何ということではなく、ほっとしましたね。やはり、そういう時は劣等感を感じますね。電気というのは、数学に頼るところと実験に頼るところと両方あります。本当は両方できるといいのですが、私は実験があまり好きじゃなかったし得意でもなかった。肝心な実験はやりましたけどね。勉強しないといけませんね。勉強しないと電気はつらいです。

学長の学生時代の生活は、どのようなものでしたか？

私は九州から出てきたので寮に入りたいと思ったのですが、大学の寮には入させてもらえませんでした。2年の時に、地元の県の方が理工系の学生だけを入れる寮を建てたので、そこに入っ生活をしました。いろんな人と寮で野球やら釣りやいろいろしました。もちろん勉強もしましたよ。勉強をしないと後が大変ですから。今の学生さん

とは随分違う生活でしょうね。私は家庭教師のアルバイトをしましたが、工事現場などで肉体労働的なアルバイトをしている人もいました。奨学金も貰いましたから、お金がなくて困っていたということはありませんでした。朝と夜は寮で食事も出来ましたし、昼は大学で食事をしていました。当時はまだ外食券（注）がありましたので、学食が安く食べられたんですよ。まあ、とにかくいろいろありました。今ほど社会がギスギスしたような感じはありませんでした。今はどうですか？電車に乗っても電話をしたりとか、なんかこうギスギスしていませんか。不愉快なことがいっぱいあるでしょう。

なぜ、このようなギスギスした社会になったと思われますか？

これは私の持論なのですが、このような風潮は工業化社会がもたらす弊害ですね。農業と違い工業というものは、土地をそれほど必要としません。農業はみんな家族で生活している。そのような社会では、東京のような人込みの中に出でていこうと考える人は、ほとんどいません。しかしそれが工業になると、安いところに工場を建てて、そこに若い人だけを雇う。そこに若い人たちが家庭を築いていく。東京だと土地は高いから、工場を北海道に建てたり、最近は、インドネシアなど海外にも工場を建てるようになってきた。そうなると、人間関係がルーズになるような方向に向かってしまう。どこでも同じでしょう。タイでも同じですが、生活水準は低かったかもしれないけど、低くてものどかな生活を送っていた。そのような土地に、日本人が工場を建ててタイの人間に働きさせる。それで家賃が安くて前よりも生活環境

のいいアパートなどに住まわされて、家とは切り離される個の生活となる。このようにして、都会での生活はギスギスしていきます。これは工業化のしあわせがない結果ではないでしょうか。アメリカを工業化社会と考えられるかもしれません、あの国も工業製品を作っていますが、ほとんど農業社会です。確かに工業もやっていますが、アメリカでの工業製品といつて何がありますか？確かに飛行機は、アメリカ以外ではほとんど生産できません。ヨーロッパは完全に負けています。しかし、自動車はなかなかそうはいかない。家電も同じです。改めて考えてみると、アメリカが工業国かというと、そうではないんですよ。例えば、インターネットという概念は作り出したけど、光ファイバーは作っていないでしょう。光ファイバーそのものは、日本が作っているんですから。光通信に必要なレーザーダイオードなどの素子は、ほとんど日本で生産されているんです。日本は工業国ですから。結局、アメリカはシステム国なんですよ。あの国にはシステムを考えることができる人がいるんです。考えてみると、飛行機関連ビジネスというのは航空というシステムであって、それはアメリカが作り出したものです。日本の羽田など空港の設計的なものとかは、すべてアメリカから持ってきて使っている。システムを作り出すような力は、残念ながら今の日本はない。振り返って考えると、過去においても、日本はシステムを作ったことがないんです。

（注）戦中・戦後の食糧不足の時代に、家庭外で食事する者に対して米穀の配給の代わりとして政府が発行した券のこと。昭和16年4月から配給制の実施に伴って発行が開始された。

## システムが作り出せる環境

日本がシステム国ではないというのは、どのようなことですか？

過去にさかのぼって考えてみましょう。日本が海外から学んだという例の初めに、遣隨使や遣唐使があります。その遣隨使や遣唐使で何を教わってきたかというと、政治のやり方、都市の建て

方、宗教のあり方など、システムを全部教わってきたんですよ。それを奈良や京都に取り入れて、日本流に部分修正したわけです。要するに、真似をしたんですね。その次は少し時代は飛びますが、明治初期も元々が武士などで優秀な人たちが多く欧米に留学しました。そこで彼らは、海外の政治、経済、大学のあり方などあらゆるもの

を学んできたんです。日本はそのシステムにそのまま乗って、ヨーロッパのやり方を真似しています。第二次大戦に負けた後は、アメリカに出向いて教育制度、衣食の文化、政治のやり方などアメリカのシステムを学んできました。このように日本は、それぞれの時代で様々な国からあらゆるシステムを借りてきて、それを上手に自分たちの寸法に合うように調節してきたのです。このように今までにはやってきたのですが、これをいつかどこかで打破しないといけませんね。最近よく「日本は危機だ」と言われますが、私にはどうもピンと来ない。いっそのこと「日本以外に、これだけの工業製品が作られるところはありますか」と、開き直ったらどうでしょうか。あれだけの工業製品を安い値段で作ることの出来る国なんて、日本以外にはないんです。他の国で工業製品を生産しても、値段は高くなりますから。日本は、工業に関してはもの凄い力を持っています。それを武器にすれば危機ということはないでしょう。

今、世界で言われていることは、いつも他の国々がシステムを提案すると、日本はそのハードウェアを作つて儲けているということなのです。例えばテレビは、東工大出身の高柳先生がいろいろの「い」の字を最初に映し出したことで勲章をもらいましたが、戦後、RCAというところが最初にテレビを商品化していました。日本の大きい会社は、皆RCAの特許を使って生産したわけです。しかし今では、RCAはテレビを作つてません。作れないし作つても日本製の方が安くていいものですから。特許の期限も切れてしましましたしね。ビデオテープレコーダーもアメリカが最初に開発したんですが、これも日本の企業が作り出すと、アメリカは途中から一切止めてしまいました。そのようなわけで、日本という国は特殊な才能を持つていて、そのせいで日本は嫌われるのです。日本人というのは、他人のふんどしで相撲を取つて、いい生活をしているんじゃないかなってね。事実、日本はいい生活をしていますよ。だからこそ、大学教育というものがいかにあるべきかということを、学長になった今は考えますね。私は、この前は東京高専の校長をやつていましたが、高専というのはシステムを考える必要がないんです。高専はいいハードウェアを作つて、ロボコンに代表されるような何か奇抜なものと考えてというよう

に、非常に現実思考なのです。昔の東工大（東京高等工業学校の時）もそうだったのですが、今はここ東京工業大学に来たら、それだけでは駄目なんです。要はシステムを作り出せるような大学になってほしい。現在の日本では、東工大だけではなく他の大学でも、システムなどは作り出せません。やはり視野が狭いからでしょうか。アメリカのように、だだっ広い場所に人間がボーンと何人か住んでいて、そこで生きていくためには、法律や社会のシステムを作らなければいけません。その辺りが日本とは違いますね。やはりそういう歴史を持っているからなのでしょうか。その為に、日本にもシステムが出来るようになるにはどうしたらよいのか、ということを皆で考えてほしい。

日本でシステムを作り出せるようになるには、どうすればいいですか？

システムが出来るようになるためにも、もう少し発想が大胆にならなければいけませんね。実際に、東工大の卒業生に対する役職の割合では、課長や部長クラスは多いんだけど、社長や専務などの重役ではほとんどいない。課長や部長と社長や専務では仕事が違いますからね。そこをわきまえてないとダメです。このような状況から脱皮するような環境が、ここ東工大にあるかどうか。

社会理工や生命理工などは、東工大の幅を広げるものです。だいたい理と工だけでは、話が単純明快になりますよ。世の中はそれで割り切れるような単純なものではなく、人間的なものも必要です。このままでは、この大学が蔵前にあったとき（東京高等工業学校の時）とそう変わりえない



社会理工・情報理工がある大岡山本館

のではないでしょうか。そうならない為にも、色々なものを設置する必要があります。東工大はもう一皮むけると、非常にいい大学になりえると

## これから東工大がめざすもの

東工大は、今後どのようにしていくと思われますか？

皆さんが、自分で他の大学と比較して、自分がどういう状況にあるかということを考えてほしい。自分で分からなかつたら、卒論のときなどに先生たちと話しあつたりして少しづつ人の意見を聞いて下さい。

そもそも、理数は出来るが他は出来ないということを誇りにするようでは困ります。むしろ恥に思うくらいでないと駄目ですね。恥に思えば勉強する気になります。もっと社会を広く見るようにならなければ。人と話すとき、理数だけで話をしても面白くないですよ。世界をどう見るか、国会をどう見るかとか、今の自分の社会をどう見ているか、ということに関して発言が出るようだといいですね。

明治14年に東京職工学校が出来て、今年で4回も転身をしています。1回目の転身は東京職工学校から東京高等工業になったときで、これは高級技術者を作るという目的があつて研究とは縁の薄いものだったのです。当時の日本の社会は、それ程研究を必要としてはいませんでした。2回目の転身は、昭和4年の大学昇格のときで旧7帝大と大学という地位では肩を並べたということでしたが、現実では大きな違いがありました。東大でも京大でも入学できるのは高等学校卒業生だけだったのです。しかし、東工大や東北大、一橋などは専門学校を卒業した人も入学できたのです。このときもまだまだ差別がありました。3回目の転身は昭和24年の旧制大学から新制大学に変わったときです。このときに旧制大学の差別が新制大学になって解消されて、さらに昭和28年には大学院が出来ました。そして今年4回目の転身である「大学院重点化」というものが始まっています。これは大学の教育の主体が、今まで学部にあつたものが、大学院に移るというものです。

思います。その為に何が必要かということを皆で考えてほしい。

表1 東工大の歴史（本文に関係するもの）

M.14	東京職工学校を戦前に設置
M.23	東京工業学校に改称
M.34	東京工業高等学校に改称
S. 4	東京工業大学（旧制）に昇格
S.24	新制大学としての教育を開始
S.28	工学部に大学院を設置
H. 6	大学院情報理工学研究科を設置
H. 8	大学院社会理工学研究科を設置

大学院重点化で、東工大はどのように変わっていきますか？

現在、東工大では学部を卒業してすぐに就職するという人はかなり少なくなつて、修士を卒業して就職する人が一番多くなっている。昭和50年に、学部卒業の就職者数と修士卒の就職者数が逆転しています。学生も修士で就職するほうが有利だと考えているし、企業側でも修士を多く採用するようになってきている。今回の大学院重点化の一つの目的は、私の意見としては、修士はもとより博士卒の就職者数をもっと増やしたいということです。実際には、修士は2年で取ることが出来るということで修士進学を希望する人が多いのです。しかし、博士はそれから更に3年もかかるかもしれません。だから、博士課程への進学希望者は少ない。この現状を開拓

表2 学部・修士・博士の就職者数

年度	学部	修士	博士
S.30	315	16	—
S.40	373	118	24
S.50	291	328	68
S.60	228	555	58
H. 7	252	839	169

して、博士卒で就職する人をもっと多くしたいということです。

他の先進国と比較すると、日本は非常に博士の数が少ない。イギリスと比較して考えると、人口は日本よりもはるかに少ないので、博士の数は倍以上になっています。そもそも博士というのは修士とは違う。違わなければ意味はないのですが、博士がたくさんいるというのが、日本の世界にお

ける地位を上げる。そして、その状況が、システム作りの出来る日本という国にしていくのではないかと思っているんです。アメリカの学部生は、専門的なことはあまり知りません。アメリカの場合、学部教育の程度は日本よりも低いけれど、修士課程になるとしっかりやっている。更に博士課程になると、自分で考えてやらなければならないようになっています。

## 問題を作り出せる学生になろう

東工大生に期待されることは何ですか？

学部・修士・博士でどういう違いがあるのか。私は学生のころから考えていたのですが、学部の卒論というものは、先生から与えられた卒業研究のテーマをこなせばそれでいい。分からぬことあるからといって、それを先生に聞くのではなく、自分の持っている知識と、それで不足であれば自分で勉強して、それをしっかりと分かるようにすればそれで十分じゃないかなと思います。分からぬから、テーマとして与えられているんですから。ところが、最近はそういうところまでいかなくて、学生はコンピューターをやたらに動かせばいいと思っている。修士で卒業する人と博士に進む人とはそれぞれ違うのですが、基本的には、修士の人は自分でその分野の問題点を見つけたらいいのではないかと思います。その問題の周辺がどうなっているのか、それが分かればいいのであり、問題自体が解けなくてもいいのです。博士に進学した人は、その自分で探した問題を解いて意味のある結果を出すようにすればいい。学部・修士・博士にはそのような違いがあるのでないでしょうか。いずれにしても、全部先生に任せるというのは駄目です。実際にはそのような学生が修士課程にもいますが…。日本の先生たちは、学生

を卒業させないと困るということから、一生懸命お膳立てをしてあげるという非常に悪い癖がある。私も何例かそういうことがありました。しかし自分でテーマを設定して自分で結果を出したほうがいいのは当たり前です。失敗してもいいんです。失敗したなら、もう一年伸ばせばいい。失敗を成功に導いたという歴史を持って、社会に出ることができる。先生から言われて成功したのでは、どこも失敗をしていませんからね。社会に出ていき失敗すると落ち込みがひどいと思われます。社会の見る目が「あの人は博士だ」ということになって。世間から「博士」という目で見られて「あの人は何でも出来るのではないか」と思われる。社会の見る目が「あの人は博士だ」ということになって。世間から「博士」という目で見られて「あの人は何でも出来るのではないか」と思われる。だからこそ失敗という免疫を持っていれば、そういうことがなくなります。いろんな大学の先生とよく話ましたが、一つでも自分のテーマを自分で探せて、それを自分なりに解決した人と、先生に与えられたテーマを五つや六つも解決した人では、前者の方がずっと伸びますね。これは間違いなく言えることです。問題作るのは難しい。問題を作ることに東工大的学生は主力を置いて生活してほしい。問題というのは、小さな問題でも大きな問題でもシステムの問題でもいいのですから。

---

以上のインタビュー内容から、読者の方々は学長に対して、どのような印象を持たれたであろうか。このインタビューが、学長の人物像を知る手がかりになれたならば幸いである。

最後になりましたが、お忙しい中、時間を割いて下さった内藤先生に感謝の意を表しつつ、筆を置きたいと思います。

(伊佐地 瑞基)